

○『百万年ピクニック』60分バージョン 成井豊＋成井稔

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／紙芝居屋が街角で紙芝居を始める。観客は、西風という名の少年一人。紙芝居のタイトルは『百万年ピクニック』。まりなという名の少女が青猫天文台にやってくる。まりなはミナミという名の作家を探して、十年も旅してきた。天文台職員の北川がみなみを呼ぶ。が、みなみは小説など書いたことはないと言う……。

○出演者／男2＋女5 計7

○上演時間／60分

登場人物 まりな

北川（天文台職員）

みなみ（天文台職員）／子ども1／傘1

ミラク（魔法使い）／子ども2／傘2

ズーベ（魔法使い）／子ども3／傘3

西風（シーファン）

紙芝居屋

自転車が一台、置いてある。荷台に、紙芝居の木枠が載っている。一枚目の紙には、「  
「よいこの紙芝居」と書いてある。そこへ、男がやってくる。拍子木を首にかけて、深  
呼吸する。背筋を伸ばして、チョーンチョンチョンチョンチョンチョン……。」

紙芝居屋

紙芝居が始まるよ！ 楽しい紙芝居だよ！ 楽しいよ、たぶん！ 早く来な  
いと、帰っちゃうぞ！ ……心に冷たい雨が降る。

子供たちが飛び出す。市場の朝か祭の夜、その十倍もやかましい。

紙芝居屋

さて、皆さん！ さて、皆さん！

何とか騒ぎを押しとどめて。

紙芝居屋

さて、皆さん！ 大変長らくお待たせしました、夕暮れ時の街角のザツ・  
エンターテインメント、紙芝居のお時間です。

子ども 1

紙芝居って何？

子ども 2

バカ、紙のお芝居だよ。

子ども 1

紙がお芝居すんの？

子ども 3

紙が歌うの？ 紙が踊るの？

子ども 1  
子ども 3  
紙芝居屋  
子ども 1  
子ども 3  
子ども 1  
子ども 2  
紙芝居屋  
子ども 1  
紙芝居屋  
子ども 3  
紙芝居屋  
子ども 3  
子ども 1  
子ども 3  
子ども 1  
子ども 2  
紙芝居屋  
子ども 3  
子ども 1

信じらんない。  
やってもらおうじゃないか。  
私は魔法使いじゃありません。  
バカだな、おまえら。紙芝居ってのは、紙に描いた絵でお芝居すんだよ。  
絵がお芝居すんの？  
絵が歌うの？ 絵が踊るの？  
それじゃ、アニメと同じじゃない。  
つまんねえの  
紙芝居はアニメじゃありません。  
どこが違うわけ？  
まず第一に、紙芝居の絵は動かない。  
動かない？  
絵っていうのはもともと動かないものなんです。レオナルド・ダ・ビンチの絵が動きますか？ ピカソの絵が動き出したら、気持ち悪いでしょう？ アニメなんて邪道です。あんなもの、芸術じゃない。  
別に芸術じゃなくてもいいよな？  
おもしろいのが一番。  
動かない絵なんて退屈。  
そんなんでお芝居できるの？  
大体、声優さんが一人もいないじゃないか。  
いるでしょう。  
どこに？  
ほら、あなたのすぐ目の前に。

子ども 3  
子ども 1  
紙芝居屋 2  
子ども 2  
紙芝居屋 2  
子ども 2  
紙芝居屋 2  
子ども 3  
紙芝居屋 3  
子ども 1  
紙芝居屋 1  
子ども 2  
紙芝居屋 2  
子ども 1  
紙芝居屋 1  
子ども 3  
紙芝居屋 3  
子ども 1  
紙芝居屋 1  
子ども 2  
紙芝居屋 2  
子ども 1  
紙芝居屋 1  
子ども 3  
紙芝居屋 3

もしかして……。  
俺だ。  
他の人は？  
いない。  
おまえ一人でやるのか？  
芸術ってのは孤独が生み出すものさ。  
言い訳にしか聞こえない。  
女の人の声はどうするの？  
当然、俺がやる。  
お婆さんは？  
あたしを呼んだかい？  
お姫さまは？  
わたくしのことをお呼びになつて？  
そんなもの見たくない！  
いいですか、皆さん。紙芝居というのは一人の人間が演じるから、絵が動かないからおもしろいんです。動かない絵を動かすのは、あなた方一人一人の心。紙芝居が楽しめるかどうかは、あなた方次第なんです。  
てことは、紙芝居がつまらなくても、それはあなたの責任じゃない？  
あなたの責任です。  
絵が動かないのも、声優が一人だけっていうのも？  
あなたの責任です。  
私、責任キライ。  
私も。

子ども2 学級委員とか班長とか、責任のあるやつ、みんなダメ。  
子ども3 通信簿にはいつも「自分の仕事は最後までやりましょう」って。  
子ども1 そんなの、まだマシ。私なんか赤ペンでデカデカと「責任感まるでナシ」。  
子ども2 紙芝居には向いてないな。  
子ども1 私、帰る、どうせ楽しめっこないもん。  
子ども3 私も自信ない。  
子ども1 あんなもの、誰が見たっておもしろくないのさ。  
子ども2 その上、責任まで押しつけられちゃ、たまんないよな。  
子ども1 帰ろうか。  
子ども3 帰りましょう。

子供たちが歩き出す。紙芝居屋がポケットからお菓子をとり出す。

紙芝居屋 ジャーン！

子供たちの足がピタリと止まる。

紙芝居屋 責任感のない人のために、こんなものを用意しました。

子どもたち

なんだあ。

子ども2 それを先に言ってくれなくちゃ。

子供たちがお菓子を群がる。ワイワイガヤガヤと、おいしそうなのを取り合う。

紙芝居屋  
子ども 2  
紙芝居屋  
子ども 3  
子ども 1  
子ども 2  
子ども 3  
子ども 1  
子ども 2  
子ども 3  
紙芝居屋  
子ども 1  
紙芝居屋  
子ども 3  
紙芝居屋  
子ども 1  
子ども 2  
子ども 3  
紙芝居屋  
子ども 1  
子ども 3

紙芝居がつまらなかつたら、お菓子のせいにすればいい。お菓子の甘さに気を取られて、話に集中できなかったと。  
お菓子の責任を押しつける？  
これで八方丸く収まりますな。  
でもさ、紙芝居を見せてくれて、こんなものまでくれるなんて、変な人ね。  
誰かに見てもらいたくて、仕方ないのよ。  
暇なんだ。  
子供好きなんじゃない？  
お礼を言った方がいいかな？  
タダより怖いものはないからな。  
タダって、誰が言いました？  
お金取るのか？  
こっちは商売でやってるんだ。  
ボランティア活動じゃないの？  
違う！紙芝居を見せるかわりに、お菓子を買ってもらおう。これが私の経営システムだ。  
別に紙芝居なんか見たくないよ。  
こんなもの、お金払うんなら、お菓子屋で買う。  
もう食べ始めてるじゃないか。  
二、三回なめただけだから、大丈夫さ。  
ほら、食べてないのと見分けがつかない。  
食べかけは返金できないよ。  
私になめたことは、誰にも言わないであげるから。

紙芝居屋　それは違うんじゃないか？  
子ども2　（空を見上げて）あ、雨だ。  
子ども1　南の空が黒いぞ。  
子ども3　帰る帰る。

子供たちがお菓子を紙芝居屋に押しつけ、走り去る。

紙芝居屋　こらこら！　どれが食べかけかわからなくなった。

肩を落として、お菓子をポケットにしまう。

紙芝居屋　あーあ。今日の晩飯もペロペロキャンディーか（なめる）。

離れた所に、子供が一人だけ残っている。さっきから黙って見ていた少年だ。

紙芝居屋　君は帰らないのかい？

少年　……。

紙芝居屋　紙芝居はもうおしまいだよ。

少年　（黙って近寄る）

紙芝居屋　見たいのかい？　でも、一人じゃ商売にならないんだよ。

少年　（黙って木杵をのぞきこむ）

紙芝居屋　ま、商売と思わなければいいか。ほら（ペロペロキャンディーを差し出して）  
食べかけでよかったら、あげるよ、こっちはなめてないから。

少年 (受け取って)でも、いつかはこっち側に届く。

紙芝居屋 鋭いね。名前は何てんだ？

少年 西風。

紙芝居屋 よーし、西風くんのために特別ステージだ。

西風 僕、お金持ってません。

紙芝居屋 そのかわり、見終わった後に感想文を提出してもらおう、原稿用紙で十枚以上。

西風 十枚も？

紙芝居屋 それぐらいの気持ちで、一生懸命見てほしいわけだな。ほら、座って座って。

姿勢を正して、拍子木を打つ。

紙芝居屋 さて、皆さん。大変長らくお待たせしました、夕暮れ時の街角のザツツ・エ

ンターテインメント、紙芝居のお時間です。(西風に) 拍手拍手。

西風 (拍手する)

紙芝居屋 生憎の雨ではございますが、ほんのしばらくお付き合いのほどを。本日の出し物は空想科学冒険感動巨編、御存知『百万年ピクニック』。

紙芝居の一枚目を引き抜くと、二枚目には『百万年ピクニック』と書いてある。

紙芝居屋

時は宇宙歴5017年、銀河系すべてを飲み込むほどの戦争は、北の国の勝利で幕を閉じた。しかし、敗北した南の国のみならず、勝利を収めた北の国にも多くの犠牲が生じた。街は廃虚と化し、人々は住む所を探して、あちらこちらへと散っていった。だが、本当の戦いはまだ終わってなかったのだ。



物語はそれから十年後に始まる。

二枚目を引き抜くと三枚目はない。木柵の向こうに一人の少女が立っている。右手に傘、左手に旅行カバン。

紙芝居屋

その娘の名はまりな。一人の男を探して旅をしている。

まりな

あのすみません。この辺りに、ミナミっていう人はいませんか？

紙芝居屋

誰に向かって聞いているのだろう。少なくとも、我々二人でないことだけは確かだ。

まりな

ひどいな。無視してる

紙芝居屋

別にそういうわけじゃないんだけど。

まりな

いいですよ。他の人に聞くから。

西風

(紙芝居屋に)嫌われちゃったみたいですね。

紙芝居屋

行こう、西風君。場面が変わる。

紙芝居屋と西風、自転車を押して去る。

色とりどりの傘を持った人々がやってくる。その顔は傘で見えない。

まりな

あの、すみません。

傘1

何？

まりな

この辺りに、ミナミっていう人はいませんか？

傘2

ミナミ？

まりな

ええ、ミナミさん。

傘3

ミナミねえ。

まりな

(薄い冊子を取り出して) ほら、この小説を書いた人。

傘1

小説家のミナミさん？

まりな

たぶん。

傘2

小説家じゃないミナミさんなら知ってるけど。

まりな

そのミナミさんにはどこへ行けば会えますか？

傘3

青猫天文台へ行ってみたら？

まりな

青猫天文台？

傘1

つばくろ森の丘の上。

傘2

ほら、あそこに見えるだろう？

まりな

確かにミナミさんですか？

傘3

それは自分の目で確かめるんだね。

傘 1  
まりな くれぐれも、かみつかれないように。  
傘 2  
まりな ありがとう。  
まりな それで、君の名前は？  
まりな まりな。

傘を持った人々が去り、まりなだけが残る。そこへ白衣の男がやってくる。彼の名前は北川。

北川 君君君、いつまで傘を差してるんだ？

まりな 雨が止むまで。

北川 頭の上を見てごらん。

まりな 傘ですけど。

北川 そのまた上は？

まりな (傘を外して) 天井。

北川 家の中に入ったたら、傘をたたむのが礼儀じゃないのか？

まりな それじゃ、ここは？

北川 青猫天文台へようこそ。

まりな (周囲を見回して) いつの間に着いたんだらう。

北川 見学ですか？ しかし、よりによってこんな日に来るなんて、雨雲でも観測

まりな しようっての？

北川 天文台っていうのは雲の観測もするんですか？

まりな するわけないだらう。

北川 でも、今——

北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな

どんなに性能のいい望遠鏡でも、雲を透かして星を見ることはできない。星が見たかったら晴れた日に来なくっちゃ。別に星はどうでもいいんです。

だったら、やっぱり雲か？

私は望遠鏡を覗きに来たんじゃないやありません。こちらにミナミさんという人がいるって聞いたから。

みなみ？

ぜひ一度お会いしたくて、家を飛び出してきたんです。

君、みなみ君の知り合い？

私の方が一方的に知ってるだけですけど。

それならそうと先に言えればいいんだ。

それじゃ、やっぱりいるんですね、ミナミさん？

今、呼んできてあげるよ。

ちよっと待って（と深呼吸する）

何だい、深呼吸なんかして。

いざ会えるとなると、何だか緊張しちゃって。

オーバーだな。

だって、ミナミさんを探して、十年も旅をしてきたから。

十年も？

住所も何も知らなかったし。

感動のご対面でわけだ。

こちらのミナミさんが私の探してるミナミさんならね。

そこへ、白衣の女が飛び出す。彼女の名前はみなみ。

みなみ ちよつとあんた、どういうつもり？

みなみ 何か？

みなみ 傘よ、傘。家の中で差すなんて、非常識じゃない。

みなみ すみません、つい。

みなみ 何がついよ、ついついやったことなら、何でも許されると思ってたの？

みなみ 別にそんなつもりじゃ。

まりなが傘を閉じて、振る。しぶきがみなみの顔にかかる。

みなみ 冷たい。

まりな あっ、すみません。

みなみ わざとね？

まりな いいえ、傘をたたもうと思つて、つい。

みなみ つい？ ついですつて？ やっぱりあんた、ついつて言えば何でも許される

まりな と思つてるわね？

まりな そんな、言いがかりです。

みなみ 言いがかり？ 言いがかりですつて？ 私があんたに言いがかりを付けてる

まりな つて言うの？ あんたは無実で、悪いのは全部私？

まりな そういう意味じゃなくつて――

みなみ 意味が違う？ 私があんたの言いたい意味を取り違えた？ 今度は私のこと、

みなみ バカだつて言いたいわけ？

まりな  
北川  
まりな  
みなり  
みなり  
まりな  
みなり  
みなり  
北川  
北川  
まりな  
北川  
まりな  
まりな  
まりな  
北川  
まりな  
まりな  
北川  
まりな  
北川  
まりな

(北川に) 何なんですか、この人？

感動のご対面。

それじゃ、この人がミナミさん？

私の名前に因縁つける気？ 私はみなみ。

嘘だあ。

北川君、誰よ、この子。

君に会うためにここまで来たんだってさ。十年も旅をして。

私に会うため？ (まりなを見て) 知らないわよ、こんな子。

でも、(まりなに) 君が探してたのはこの人なんだろう？

さあ……。

何だよ、さあって。

私も会ったことないんです、ミナミさんには。顔だって見たことない。

顔も知らない人間を探していたのかい、十年も？

だから、最初は間違えてばかり。ミナミって名前の、結構たくさんいるんですよね。

手がかりは名前だけなのか？

そうです。ミナミナツヒコ。

みなみなつひこ。男じゃないか。

たぶん。

あんた、私が男だって言うの？ 性別は女でも、性格的には完全に男だって

言い張るつもり？

そんなことまで言ってますね。

みなみっていうのは苗字なのか。それなら、全くの別人だ。こっちのみなみ

は名前だからね。

(まりにな) 私の苗字は浅倉です。

(まりにな) 性格はともかく、生物学的にはギリギリ女だし。

ギリギリ？

(北川に) でも、ミナミナツヒコっていうのはペンネームかも知れないんで

す。女の人が男の名前を使うってこともあるでしょう？

ペンネームって？

ちよっと待って。

まринаがカバンの中から薄い冊子を取り出す。

まрина (まなみに) これ見て下さい。

まрина 何よ、これ。

まрина 覚えてませんか？ 十年前に発行された同人誌なんですけど。

まрина 知らないわよ。

まрина よく思い出して下さい。十年前に、原稿用紙にしたら二十二枚の短編小説を、

この雑誌に載せませんでしたか？

まрина 私が小説を？

まрина (ペーじをめくって) ほら、ここにミナミナツヒコ。この小説を書いたのは

あなたじゃありませんか？

まрина ちよっと待ってよ。私が小説なんか書くように見える？ 文学少女って感じ

する？ だいたい十年前っていったら、まだ中学生じゃないの。

北川 (まりにな) なるほど、大体、事情は飲み込めた、君が探してるミナミさん

ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
北  
川  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
北  
川  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な  
北  
川  
ま  
り  
な  
ま  
り  
な

は小説家なんだ。

さあ。

違うのかい？

小説家っていうのは、小説を書くのが仕事でしょう？

原稿料と印税で食べていくんだ。

私の知っている限り、ミナミさんの書いた小説はそれだけ。

一本だけ？

次の作品を読みたくてたまらないのに、十年間も書いてくれない。

挫折したんだな。才能のなさに気が付いたんだ。

才能はあります。

そうやって他人に褒められるのは嬉しいだろうけど、自分が満足できなかつ

たらやっぱりダメなんだよ。

(まりなに)ねえ、あんた、そのミナミナツヒコに会ってどうするつもり？

どうして二作目を書かないか、聞きたいの。

小説は辞めましたって言われたら？

でも、私はミナミさんの小説が大好きですって――

そう思ったのはあんただけなのよ。

本当に素敵なお話なのよ。巧いか下手かはわからないけど、そこには紛れも

ない真実がある。

へーえ。

真実があったから、私は感動したの。

悪いけど、他を当たってくれない？

やっぱり思い出せませんか？



みなみ

思い出せないんじゃないやなくて、私じゃないの。小説なんか一度も書いたことないんだから。

まりな

自分でも知らないうちに書いてしまったとか。

みなみ

二重人格か、私は。

まりな

もしもってことあるでしょう？

みなみ

あんた、その小説が好きなんですよ？ 何回も何回も読んだんでしょ？ だってたら、それを書いた人がどんな人か、思い浮かんでこない？ 好きな人のことは、何だってわかるものよ。

まりな

ミナミさんがどんな人か？

みなみ

私じゃないって、一目見てわからなくちゃ、嘘よ。

みなみが去る。

北川

みなみ君。

北川が去る。

まりな

太ってもいないし、痩せてもいない。かと言って、遅しいわけでもなくて、男の人にしては背中が小さい。肩を寂しげに落として、頭はちよっぴりうつむき加減。唇にはいつも雪明かりのような微笑みを浮かべて。好きな色は青。夏の海の青じゃなくて、冬の空の透き通るような……。

声（ミ） ベネトナーシユか？

まりな え？

声（ズ） ベネトナーシユでしょ？

まりな 私ですか？

声（ミ） 私、じゃなくて、ベネトナーシユなんだろ？

まりな 何のことだか、さっぱり——

声（ズ） はいって言えばいいのよ。はいって。

まりな はい。

ミラク やっぱり、ベネトナーシユか！

まりな は？

ミラクとズーベが飛び出す。

ミラク （まりなに） 探したんだぞ、ベネトナーシユ！

ズーベ （まりなに） 世界中飛び回ったのよ！

ミラク （まりなに） 北極も南極も！

ズーベ （まりなに） チベットの氷河まで行ったのよ！

ミラク （まりなに） 苦労したんだぞ！

ズーベ （まりなに） でも、見つかってよかった！

2人  
まりな  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
2人  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
2人  
ミラク  
ズーベ

(まりなに) 行こうよ、ベネトナーシュ！ 南の国へ！

あの。

何だい、ベネトナーシュ？

つかぬことをお聞きします。

どんだん聞いてよ、ベネトナーシュ。

お二人は、どちらの方ですか？

は？ (呆れる)

(まりなに) 何、しらばっくれてんだ、このバカ！

私はバカじゃありません、私の名前は――

ベネトナーシュ。

なんかじゃなくて――

ベネトナーシュ。

とは似ても似つかない――

ベネトナーシュ。

とは全然違った――

ベネトナーシュ。

ええい、うるさい！ 私の名前はまりな。ベネト何とかじゃないの。

最初は誰でもそうさ。自分が誰だか思い出せない。あれから十年も経ってるんだからな。

(まりなに) あんたのこと責めるつもりはないわ、私だってすっかり忘れて

いたのよ。ミラクが迎えに来るまで。

(まりなに) おまえだって思い出せるよ。

(まりなに) 落ち着いて考えてみて。

まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな

すみません。私には何のことやらさっぱり。  
バカやろう！ 真剣に思い出してみる！  
（まりなに）私よ。ズーベよ。覚えてない？  
ズーベさん、ですか？  
同じ国の仲間じゃないの。ちよつと足りないところがカワイイって評判のズーベちゃんよ。  
以前どこかでお会いしましたっけ？  
いいえ。  
会ってもいないのに、思い出せるわけないでしょ？  
一度も会ってなかったって、俺たちは仲間なんだ、顔は知らなくても、名前だけじゃんと知っていた。  
それじゃ、お二人とお会いするのは今日が初めてなんですわね？  
そうだよ。  
（自分の顔を指差して）この顔見るのも初めて？  
その通り。  
だったら、どうして私がベネト何かだかってわかるんですか？  
そりゃ、わかるよ、おまえのことはよく知ってるんだから。  
（まりなに）あつ、ベネトナーシュだつて、一目見てピンと来た。  
なるほど。  
好きな人のことは何だつてわかるものなの。  
（まりなに）そういうわけで、おまえはベネトナーシュなんだ。さあ、一緒に出かけよう！  
どこへ？

ズーベ  
2人  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
2人  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
2人  
まりな  
ミラク

決まってるでしょう？

(まりなに) 南の国へ！

南の国って言っても、マレーシアとかパプアニューギニアとかいろいろありますけど。

南の国って言ったたら、南の国さ。

(まりなに) 悪い魔法使いのいる国よ。

悪い魔法使い？ 話がどんどん現実離れしていく。

あいつがまた動き始めたらしいんだ。今度の狙いは俺たちの命らしい。

(まりなに) 私たち三人を殺して、北の国を奪い取ろうっていうのよ。

ちよつと待って。二人でしょ？

いるでしょう、三人？

一、二。

(まりなを指差して) 三。

私の命も狙われてるの？

事は一刻を争うの。

(まりなに) 明日の夜明けまでに何とかしないと、俺たち。

(まりなに) スッ。

(まりなに) この世から消されるんだ。

でもでも、(ズーベに) あなたの言った三人目って、ベネト何かのことよね？

だから、あんたよ。

私はまりな。よかった。死なずに済むわ。

バカやろう！ 何度言ったらわかるんだ。おまえはベネトナーシュだ。間違

ズーベ　　いないんだ。ズーベ、おまえからも言っても仕方ないでしょ？  
まりな　　（まりなに）いつまでも意地を張っても仕方ないでしょ？  
ズーベ　　たぶん、何かの間違いないんです。  
ズーベ　　そうね。たぶん、どちらかが間違ってるんだらうね。あんたが間違ってるか、  
まりな　　私たちが間違ってるか。  
ズーベ　　あなたたちに決まっています。  
まりな　　確率で考えてみましょうよ。一人のおバカさんが間違える場合と、二人の正  
ズーベ　　直者がいっぺんに同時に間違える場合と、どちらの確率が高いか。  
まりな　　そう言われたら……。  
ズーベ　　わかるでしょ？ やっぱり、あんたは私たち北の国の魔法使いの仲間なのよ。  
まりな　　魔法使い？　　あなたたちも魔法使いなんですか？  
2人　　そうだよ。  
まりな　　嘘だあ。  
ミラク　　嘘なものか。レッキとした魔法使い。南の国の魔法使いにはかなわないけど。  
ミラク　　だったら、魔法を見せてよ、ホーキに乗って空を飛ぶとか、ガマガエルに変  
まりな　　身するとか。  
ミラク　　バカにしてるな、おまえ？  
まりな　　もしかして、今更ハリーポッターおたく？　小学生じゃないんだから、映画  
ズーベ　　と現実をごっちゃにしないでよ。  
まりな　　しようがないじゃない。ホントに魔法使いなんだから。  
2人　　だから、やってみせてって言うてるの。空を飛べるんでしょ？  
まりな　　（首を振る）  
まりな　　飛べないの？　魔法使いなの？　それはちよつとまずいわね。

ミラク

もともと魔法使いっていうのは、一人に一つしか魔法が使えないんだ。何でもできる魔法使いなんて、あいつだけさ。

まりな

あいつって？

ズーベ

南の国の魔法使い。

まりな

へえ、でも一人に一つだけなんて、何だかつまんないわね。

ズーベ

傷つくなあ……。

まりな

あなたは何ができるの？

ズーベ

私の魔法は、予知能力。

まりな

やるじゃない。どれくらい先の未来まで見通せるの？

ズーベ

三秒。

まりな

たったの？

ズーベ

三秒あれば、自分に降りかかる災難は大抵避けられる、でも、他の人のはダメね。「危ない！ 石が落ちてくるわ！ 逃げて！」って、言い終わる前に

ズーベ

石が落ちてくるから。

まりな

それじゃ、役に立たないわね。

ズーベ

（落ち込む）

まりな

（ミラクに）あなたのもどうせ、役に立たない魔法なんですよ？

ズーベ

俺のは凄いだぞ。

まりな

どんなの？

ズーベ

まりながミラクの目を見る。まりなの動きが止まる。

ミラク

（まりなの耳を引っ張りながら）ホイ。

まりな  
ミラク  
まりな  
ミラク  
まりな  
ミラク  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな

あれ？

というように、俺に見つめられると、あらゆる生き物が凍りついて動けなくなる。

それでガラが悪いサングラスをしてたんだ。

人混みの中では、いつも伏し目がちに歩いてます。

性格が暗くなりそうね。

別に暗くはならないけど。

歪んじやったのね。

(落ち込む)

でもさ、私がもしベネト何とかなら、私にも魔法が使えるわけ？

もちろんよ。

どうせあなたたちみたいにつまんないのだろうけど。

とんでもない。あなたの魔法は南の国の魔法使いより凄いのよ。

そんなに凄いの？

私が？

あんたが

ちなみに、どんな魔法なのかな？

さあ。

知らないの？

自分の魔法は自分で見つけ出すしかないのよ。私だって努力に努力を重ねて、

魔法使いになったんだから。

私にはないかもしれないじゃない。



ミラク

まりな

ミラク

まりな

ズーベ

まりな

2人

まりな

2人

まりな

ミラク

まりな

ミラク

まりな

ミラク

ズーベ

まりな

ズーベ

まりな

ズーベ

バカだな、おまえ。人間なら誰だって一つぐらい、魔法が使えるのさ。大抵の人間はそれに気付かないけど、俺たちは見つけ出した。おまえだって見つけられるさ。

でも、例外があるでしょ？

たった一つの例外は、存在そのものが魔法であること。ユニコーンやグリフォンは生きていること自体が魔法だから、金縛りや予知はできない。

それじゃ、私にも魔法が使えるんだ。

あんたは私たちのリーダーだからね、特別凄い魔法が使えるはずよ

そんなに凄いの？

凄いのよ。

私が？

あんたが。

そう言えば、私、子供の頃に一度だけ、ベネトナーシュって呼ばれたことがある。

本当か？

家族旅行で鬼怒川温泉に行った時、駅のホームで弁当屋のおじさんが「ベネトナーシュ！」って。あの時は「弁当とジュース！」って聞こえたけど、弁

当とジュース、ベネトナーシュ。

ちよつと苦しいな。

(まりなに) スべったね。

私、努力して、自分の魔法を探してみる。そんなに凄い魔法なら、努力する

価値はありそう。

やっとなわかってくれたのね。

やっとなわかってくれたのね。

やっとなわかってくれたのね。

ミラク  
まりな  
ズーベ  
2人  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな

(まりなに) これで三人揃ったわけだ。グズグズしないで出かけよう。  
どこへ？

決まってるでしょ。

(まりなに) 南の国へ！

(まりなに) 南の国の魔法使いを殺すんだ、明日の夜明けまでにやらないと、こっちが殺される。

南の国の魔法使いって強いんでしょ？

大丈夫よ。こっちにはベネトナーシュがいるんだから。

ベネトナーシュって私よね？

あんただけが頼りなのよ。

まだ自分の魔法が見つかってないのにな？

いざとなったら思い出すさ。さあ、行こう！(走り出す)

(まりなに) 行こう！(走り出す)

一抹の不安を感じてしまう私。

ほら、早く行きましょう。

まあ、魔法が手に入るんならね。

2人が去る。

北川がやってくる。

北川  
まりな

どこに行くんだ。  
南の国。

北川  
まりな

諦めるのかい、ミナミさんは？  
まさか。十年も探してきたのよ。絶対に探してみせる。

北川  
まりな

それなら、どうして南の国へ。  
魔法を手に入れるのよ。

北川  
まりな

魔法だって？  
どんなに遠くに離れていても、その人の心に話しかけることができる魔法。

北川  
まりな

そんな魔法が手に入るなら、少しぐらい危険な目に遭ったって  
そんなに会いたいのかい？ ミナミさんに。

北川  
まりな

ええ。  
よっぼど凄い話なんだろうな。

北川  
まりな

あなたも一度読んでみて。  
本は、天文学か物理学の本しか読まない。

北川  
まりな

小説は？  
一ページ読み終わらないうちに、バカらしくなる、所詮はちっぽけな人間が  
作り出した嘘っぱちなんだって思えてきて。

まりな

嘘じゃないわ。

北川 イヤ、嘘だ。君がこいつに惚れ込んだのは、とびつきり上等の嘘だったからさ。

まりな

勝手に決めつけないで。読んでもいないくせに。

北川

題名は何て言うんだい？

まりな

またバカにするでしょう。

北川

しないしない。

まりな

私、急ぎの用がありますので。

北川

意地悪しないで教えてくれよ。

まりな

『百万年ピクニック』。

北川がまりなの手から、冊子を取る。

北川

紙芝居屋と少年のお話か。

まりな

一ページでバカらしくなりました？

北川

そうでもないけど、これのどこが凄いのか。

まりな

まだ読み始めたばかりじゃない。

北川

後は想像がつくよ。紙芝居が終わると、少年は涙を流して感動してるんだ。

まりな

そんなに単純な話じゃありません。

北川

でも、最後はそうなるんだろ？（ページをめくる）

まりな

（冊子を抑えて）結末を先に読まないで。

北川

（まりなの手を逃れて）まりな君、この本貸してくれよ。

まりな

ダメ。

北川

いいだろう？ 最後までじっくり読んでみたいんだ。

まりな

ダメよ。その本は誰にも貸さない。

北川

ケチケチするなよ、読んでくれって言ったのは君なんだぜ。

北川が走り去る。

まりな

返してよ！ 私の本を持っていかないで！

まりなが去る。

紙芝居屋が拍子木を打ちながらやってくる。

紙芝居屋

謎の小説『百万年ピクニック』！ 作者のミナミはどこに居るのだろう？

南の国の魔法使いはどんな魔法を使うのだろう？ はたしてまりなの運命は

西風がやってくる。

西風

盛り上がってますか？

紙芝居屋

何だい、そのシラけた目つきは。

西風

だって、この話、先が読めます。

紙芝居屋

子供の分際で偉そうに。そんなに単純な話じゃないんだぞ。

西風

子供にわかるんだから、よっぽど単純なんですよ。

紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風

いい度胸してるじゃないか。それなら、南の国の魔法使いの正体は誰だ。  
(紙芝居屋の耳元に口を寄せる)

間違ってたらぶつからな。

ボソボソボソ。

ギク。

当たったんですね？

それならそれなら、ミナミはどこにいるんだ。

(紙芝居屋の耳元に口を寄せる)

何から何までわかつたつもりでいるなよ。

ゴニヨゴニヨゴニヨ。

ギクギクギク。

やっぱり、僕の思った通りだ。

西風君、誰にも言わないでね。

秘密なんですか？

先がバレたら、商売にならないんだ。タダで見たんだから、恩を仇で返す

ような真似はするなよ。

別に言ったりしませんけど、誰だって気付くと思うなあ。

そうかなあ。

紙芝居って、もっとおもしろいのかと思った。

(落ち込む)

今さら、魔法使いって言われても、ピンと来ないし。

西風君、続きを見ていかないか？

(木杵を指して) これの？

紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋  
紙芝居屋  
西風  
紙芝居屋

物語は始まったばかりだ。これからガンガン盛り上がっていくぞ。  
でも、先がわかっているから。  
さつきも言ったろう。紙芝居が楽しめるかどうかは、あなたの責任です。  
自信ないなあ。  
ほらほら、もう一本あげるから（ペロペロキャンディーを押しつける）  
（ペロペロキャンディーと紙芝居を見比べる）  
好きだけ持ってけよ！（ペロペロキャンディーの束を差し出す）  
こんなに食べきれません。  
さあさあ、お待ちかね、『百万年ピクニック』の続きが始まるよ！  
西風君、また場面が変わる。 行こう、

紙芝居屋が去る。

みなみがツカツカとやってくる。

みなみ

ちよつとあんた、ペロペロキャンディーくわえて入ってくるなんて、いい度胸ね。

西風

すみません、気が付かなくて。はい（ペロペロキャンディーを差し出す）

西風

（受け取って）よくわかってるじゃない、さっきの娘とは大違い。

みなみ

ええ、そうよ。

西風

すると、ここは？

みなみ

青猫天文台へようこそ。

西風

（周囲を見回し）いつの間に着いたんだらう。

みなみ

あなた、なんで私の名前を？

西風

お噂はかねがね。

みなみ

どんな噂？

西風

天文台のアンジェリーナ・ジョリー。

みなみ

当然ね。名前は？

西風

西風。

みなみ

見学に来たの、こんな雨の日に？

西風

あの、こちらに北川さんという人はいますか？



みなみ いるけど、あなた、北川君の知り合い？

西風 僕の方が一方的に知ってるだけです。

みなみ まさか、北川君を探して十年、旅してきたって言うんじゃないでしょうね？

西風 まさか。

みなみ どういう関係？

西風 別に関係なんて。

みなみ 関係のない人間にわざわざ会いに来たの、この雨の中？

西風 一つだけ聞きたいことがあるんです。

みなみ そう。でも、さっきから姿を見かけないのよね。

西風 そうですか。

みなみ ちよつと探してくるわ

みなみが去る。

西風 すみま……。（背後に視線を感じて）北川さんですね？（振り返って）北川

さんでしょ？

北川がやってくる。

北川 君は？

西風 あなたに聞きたいことがあって来たんです、一つだけ聞きたいことがあって。

北川 僕のことを知ってるの？

西風 ええ。

北西北西北 西北 西北西北西北西北西北西北西北  
川風川風川 風川 風川風川風川風川風川風川風川

どこかで会ったっけ？  
今日が初めてです。

良かった。僕は忘れっぽい人間でね。人の顔がなかなか覚えられないんだ。  
その本ですな。『百万年ピクニック』が載ってるのは。

どうして知ってるんだ？

僕は何でも知っています、まりなさんがここに訪ねてきたことも。

覗き見してたのか。とんでもない少年だな、君は。

知っているだけです、何もかも。

何もかも？

あなたがミナミナツヒコだったことも。

ええっ！（驚く）

あなたのペンネームなんですよ、ミナミナツヒコは。

シーッ！（西風に駆け寄って）大きな声で言わないでくれ。

どうして言わなかったんですか、まなりなさんに？ 忘れていたわけじゃない

いんですよ？

ああ。

自分の書いた小説を好きだって言ってくれてるのに、どうして言わなかった

んですか？

君にはわからないよ。

わからないから聞いています。

聞いたってわからない。

子供だからって、バカにしないでください。

そうじゃなくて、僕自身がわかってないからさ。とうの昔に忘れちゃって、

北 西 北 西  
川 風 川 風

北 西 北 西 北 西 北 西 北 西 北 西  
川 風 川 風 川 風 川 風 川 風 川 風 川 風

思い出にさえなつてないものを、いきなり目の前に突きつけられたんだ。何  
て答えればいいのか。

僕ですって、正直に言えばいいでしょう。

できないね。

どうして。

僕はミナミナツヒコじゃない。

ミナミでしよう？ あなたのペンネームでしよう？

十年も前の話だよ。今の僕はただの北川。

でも、この小説はあなたが書いた。

十年前の僕がね。

それなら、ミナミはあなたです。

違う。

どこが違うんです。

全部さ。頭のてっぺんから爪先まで、僕は変わってしまったんだ。

あなたはあなたじゃないですか。

忘れてたんだよ。小説を書いたことも、ミナミナツヒコってペンネームも。

彼女の話を聞いても、この本を見せられても、思い出せなかった。『百万年

ピクニック』って題名だけが、頭の隅のまた隅に消えずに残ってた。彼女が

来るのが一日遅かったら、それだって忘れていたかもしれない。

題名だけは覚えてたんですね？

覚えてたっていうか、忘れることさえ忘れてたんだ。

それでも、あなたはミナミナツヒコじゃない？

少なくとも、ここにいる僕じゃない。

西風  
北川  
西風  
北川  
西風  
北川

どこにいるんですか、本当のミナミナツヒコは？  
どこにもいないさ。今はもう。  
でも、まりなさんは探しているんですよ。十年も旅をして。  
どうしても会いたかったら、十年前に行くんだな。  
そんな。  
ミナミナツヒコだった僕の所へ。

西風が去る。

みなみがやってくる。中学校の制服を着ている。

みなみ

北川君！

北川

なんだ、みなみ君か。

みなみ

北川君、こんな所に呼び出して、何の用事？

北川

僕が君を？

みなみ

授業が終わったたら、校舎の裏に来てくださいって。

北川

人違いだよ。僕はたまたま通りかかっただけで――

みなみ

知ってるわよ。

北川

(コケる)

みなみ

だけど、私に話があるんでしょ？ 二人きりになって、打ち明けたいことが

北川

あったかなあ。

みなみ

とぼけるんじゃないの。あんたの気持ちはお見通しなんだから。

北川

そう言われても、何のことだか。

みなみ

今さら隠してもムダよ。洗いざらい白状しなさい

北川

うーん。

みなみ

ほらほらほらほら。

北川

別にこれと言って話なんか。

みなみ

私ね、はっきりしない人って嫌いなものよ。

北川

そうか。

みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ 北川 みなみ

そうなの。

じゃ、特に思い当たることがないから。(歩き出す)

北川君！(薄い冊子を突き出す)

(立ち止まる)

この本は何なのよ。

どこで手に入れたんだ？

読んだわよ、『百万年ピクニック』。これ、あなたが書いたんでしょ？

僕が？ 小説を？ まさか。

演技が下手。話は全部、東山先生から聞いているの。

あのおしゃべり教師。

先生に頼んで載せてもらったんだって？ サッカー少年が小説なんて意外ね。

悪かったな。

あら、褒めてるのよ、小説家になりたいなんて、凄じやない。

まだ決めたわけじゃないんだ。才能があるかどうか、わからないし。

なかつたら？

諦めるさ。

そうなの。小説家になるのが夢じゃないの。

君はどう思った？ 読んだんだろ、小説。

一回だけね。

諦めた方がいいって思ったかい？

初めて書いた小説なんでしょ？

ああ。

一つだけじゃわからないけど。

北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川  
みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ  
北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川 北川  
みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ みなみ

わからないけど？

北川君、何を考えながら書いたのかなって。

僕が？

私ってね、いつも小説を読む時、この人は何を考えながら書いたのかなあ  
て思うの。この場面はクラシックでも聞きながら書いたのかな、とか。こ  
の登場人物が一番気に入ってるな、とか。

僕の小説は。

…何も。

何も思わなかったのか？

もしかして何も考えずに書いたの？ ロボットみたいに無表情で原稿用紙の

マスを埋めていったの？

そうかもしれない、この小説を書いている時は、冷たいロボットだったのか

もしれない。

でも、ロボットに小説は書けない。

書けるさ。文字と記号と表現パターンとプロットをプログラミングすれば、

ロボットだって小説が書けるんだ。

でも、あなたは人間よ。

わからないぜ。頭をパカッて外したら、電子頭脳がウィンウィン唸ってるか

もしれない。

どうしてロボットだって言い張るの？

君が言い出したんじゃないか。

勝手にしなさい、ロボットの書いた小説なんて、誰も読みたがらないわ。

(落ち込む)

みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川  
みなみ 北川

落ち込むことはないでしょ？  
どうせ僕には才能はないよ。

でもでも、小説はともかく、ペンネームは素敵だわ、ミナミナツヒコ。この名前にこめられている北川君の気持ち、みなみはしっかり受け取りました。気持ちって？

トボケるんじゃないの。あんたの気持ちはお見通しなんだから。

そう言われても何のことだか。

ペンネームはミナミ。私の名前もみなみ。はたしてこれが偶然の一致でしょうか。

偶然の一致だね。

誤魔化してもダメ。名前なんて星の数ほどあるのに、わざわざ私の名前を選んだ理由は一つ。

何なんだい？

北川君の口から言ってる。

何を言えればいいのさ

私ね、はっきりしない人って嫌いなの。

そうか。

そうなの。

じゃ、特に思い当たることはないから。(歩き出す)

北川君！

(立ち止まって)人間からロボットを引いたら、何が残る。単純な引き算さ。答えはここに書いてある。この小説から文字と記号と表現パターンとプロットを引いたら、何が残る。答はゼロ。ロボットの書いた小説なんて、誰も読



みなみ  
みません。  
北川君……。

北川が走り去る。みなみが望遠鏡を取り出して覗く。

みなみ

望遠鏡はレンズの屈折を利用して、遠すぎて見えないものを見るんです。みなみはいつも見つけています。北川君を、いつまでも。

まりな・ミラク・ズーベが望遠鏡を覗きながらやってくる。

7

まりな  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
まりな

いつまでここに居る気？

中の様子がわからないと。

あれ、青猫天文台よね？

お城よ。

お城？

あの中に、南の国の魔法使いが住んでるの。

どう見ても天文台だけど。

気を付けろよ。敵はもう気付いているかもしれない。

(まりなに) こんな大きな水晶に映して見てるかも。

南の国の魔法使いってどんな人？ 男なの？ 女なの？

会ったことないから。

(まりなに) 人前には姿を現さないんだ。会った奴なんていないんじゃないかな。

私は会ったわ。

本当か？

(まりなに) 男だった？ 女だった？

女だった。性格は限りなく男に近いけど。

ミラク  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
まりな  
ズーベ

強そうだった？

ムチャクチャ強そうだった。魔法なんかいらなくて感じ。

恐ろしいこと言わないでよ。これから戦おうっていうのに。

(まりなに) 戦うのはおまえなんだからな。何とかしてくれよ。

私じゃ勝てっこないわよ。体力が違い過ぎる。

その分は魔法でカバーするのさ。

どんな魔法？

まだ思い出していないの？

さつきから考えているんだけど。

迷いがあるから思い出せないの。自分には魔法があるって、心の底から信じなくちゃ。

本当にあるのかな？

あるわよ、凄いのが。南の魔法使いなんか簡単に捻り潰せるぐらいの。

例えば？

例えば、ほしい物が何でも出せるとか。

そんなんで勝てるの？

勝てるわよ。ピストルでもマシンガンでも爆弾でも、手に入るじゃない。

出す前にやられちゃったら？

やられる前の体がほしいって思えばいい。

それは凄いわ。

よく考えてみて。あんたが使えるのはこの魔法じゃない？

(じっと考えて) わからない。

バカやろう！ もったいぶってる場合じゃないんだぞ！

ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 2人  
 ミラク  
 まりな  
 ミラク  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 まりな  
 ズーベ  
 二人  
 ズーベ  
 ミラク  
 ズーベ  
 ミラク

(まりなに) いいのいいの。焦らなくてもそのうち思い出せるわよ。ありがとう、ズーベ。

と優しく見守るかわりに、お願いがあるんだけど。

お願いって？

もしもあんたの魔法が何でも出せるってやつだったら。

だったら？

私にも一つ。

俺にも一つ。

出してほしい。

(ミラクに) あんたも？

一つぐらいいいだろ？

あなたたちのほしいものって何よ。

笑わないで聞いてくれる？

人に笑われるようなものがほしいの？

そうじゃないけど、絶対に笑わないうって約束して。

約束する。

ミラクもね。

約束する。

私がほしいのはね、脳みそ。

えっ？

持っていないのよ、私。

一グラムもか？

(頭を叩いて) 聞いてよ、このうつろな響き、完全に空っぽでしょ？

まりな  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
まりな

洞窟みたい。  
だから、こんなにバカなの。人並に考えるってことができないのよ。  
ちよつと足りないのかと思っただら、全部足りなかったのか。  
私は頭が良くなりたいたんだ。でも、脳みそがないから、いくら勉強しても無  
駄。脳みそさえあれば、努力次第でいくらでも賢くなれるのに。  
売ってないのか？ 脳みそ。  
どこに？  
ドンキとか。  
行ったわよ、ドンキホーテ。でも、白みそ赤みそ蟹みそはあるくせして、脳  
みそだけは置いてないの。  
普通はそうよ。  
だから、お願い。私の頭の中に脳みそを出して。シェークスピアなんて贅沢  
言わないからせめて、夏目漱石ぐらい。  
贅沢言うな。  
芥川龍之介。  
贅沢言うな。  
又吉直樹。  
おまえね。おまえがそんなもらったら、俺、アメリカ行くからな。  
賢くなれば、私の魔法がもつとうまく使えると思うんだ、予知してから三秒  
の間にクルクルクルって頭が回転して、周りの人をもつともつと助けられる  
ようになる。  
俺もそうだ。  
ミラクも？

まりながミラクの目を見る。まりなの動きが止まる。

ミラク (まりなの耳を引っ張りながら) ホイ。

まりな つい見てしまった。

ミラク 俺と目が合うと、みんな動けなくなるだろ？

ズーベ それहतぶん、俺が相手の目を恐がってるからさ。

ミラク ミラクが恐がってる？ 嘘ばかり。

ズーベ バカやろう！ 本当の俺はシャイネスガールなんだよ、他人に見つめられる

まりな のが恥ずかしいんだ。だから、目が合うと相手を凍らしちまう。

ミラク 視線恐怖症ってやつね。

ズーベ もし俺に勇気があれば、誰かを見たり見られたりできるようになる。

ミラク 相葉くんと見つめ合うこともできるわね。

ズーベ (ズーベの頭を叩いて) 名前を出すな！ (まりなに) とにかく、勇気があれば、俺の魔法がもつとうまく使えると思うんだ。凍らせたいと思う時だけ、

ズーベ 相手を凍らせるようになる。

ズーベ (まりなに) お願い、ベネトナーシュ。

ミラク (まりなに) 俺のほしいものを出してくれ。

まりな ……難しいわね。

ミラク まさか断ったりしないだろうな？

ズーベ 脅してどうするの。

まりな あなたたちがもし脳みそと勇気を手にいれたら、魔法が使えなくなるんじゃないかしら。

ミラク

どうして

まりな

わからなけれど、そう思うのよ。

ズーベ

そんなことないよ。私たちの魔法がもつといかせるようになる。

ミラク

(まりなに) おまえだって、どうしてもほしいものがあるだろ？

魔法が使

まりな

私だって、どうしてもほしいものがある。でもね、何か一つ手に入れたら、

ミラク

必ず何か一つ失うものよ。

ズーベ

どういう意味だよ、ベネトナーシュ！

(まりなに) ベネトナーシュ！

まりなが去る。後を追って、ミラク・ズーベが去る。

紙芝居屋が拍子木を叩きながらやってくる。

紙芝居屋

降りしきる雨。忍び寄る闇。南の国の魔法使いとの最後の戦いが迫る。はたしてまりなは自分の魔法を見つけることができるだろうか。こうして物語はクライマックスへなだれこむわけですな。あれ？

紙芝居屋が周囲を見回す。

紙芝居屋

西風君？ 西風君？

辺りを探すがいない。

紙芝居屋

あんまりつままないんで、帰っちゃったの？ おじさんのこと、見捨てたの？  
西風君？

静かだ。

紙芝居屋

黙って帰るなんてひどいじゃないか。君のこと好きだったのに。も、もちろ  
んおじさんも君も男だから、好きなんてのはおかしいけど、この紙芝居、君



にはおしまいまで見てもらいたかったんだ。

紙芝居屋が空を見上げる。

紙芝居屋　　いいかい、西風君。物語の続きはこうさ。

紙芝居屋が去る。

ミラクとズーベが飛び出す。息を潜めて、辺りをうかがう。後から、まりながノコノコやってくる。

まりな 何してるの？

2人 シーッ！

ミラク (まりなに) 大きな声出すな。

ズーベ (まりなに) 気付かれたらどうするの？

まりな 戦いに来たんじゃないの？

ズーベ 正面からぶつかって、勝てるわけないでしょ。

ミラク (まりなに) 作戦だよ、作戦。

まりな 教えて教えて。

2人 シーッ！

ズーベ (まりなに) うるさいなあ。

まりな 静かにするから、教えてちょうだい。

ミラク ズーベ、説明してやれ。

ズーベ (まりなに) いい？ 南の国の魔法使いはありとあらゆる魔法を使うのよ。

まりな 私たち三人が束になったって、かないっこないじゃない。

ズーベ そうね。

まりな ベネトナーシュが自分の魔法を思い出してくれれば、望みはあるけど。

まりな

難しいみたい。

ズーベ

そこでもう一度考えてみて。魔法対魔法で戦えば、確かに敵の方が強い。それなら、敵の魔法を使えなくすればいい。

まりな

どうやって？

ズーベ

ミラクに見つめられると、あらゆる生き物が凍りつく。

ミラク

（まりなに）勝負は一瞬で決まる、敵が俺を見なければ、俺の魔法はかから

まりな

ない。

ズーベ

もしかからなかったら？

まりな

あんたの出番よ。

ズーベ

私？

ミラク

おまえの魔法に俺たち三人の命を賭ける。

まりな

思い出せなかったら？

ミラク

死ぬ時はみんな一緒。

まりな

私は遠慮しておくわ。

ズーベ

今さら何言ってるの。体は三つでも、心は一つ。たとえ死んでも離れないって、北極星に誓ったあの夜を忘れたの？

まりな

忘れた。

2人

おい！

ミラク

（まりなに）今から作戦を説明する。おまえはここにいろ。

まりな

了解。

ミラクとズーベが出口の脇に立つ。

ミラク  
まりな  
ミラク  
ズーベがここに敵を誘き出す、おまえはそつちに、俺はこつちにいる。  
それで？  
ここから敵が出てくる。

ズーベが出てくる真似をする。

ミラク  
まりな  
ミラク  
そうしたら、笑え。俺を指さして、ゲハゲハ笑うんだ。ほら。  
あはははは！  
すると、敵は振り向いて。

ズーベが振り向いて、ミラクの目を見る。ズーベの動きが止まる。

まりな  
ミラク  
まりな  
ミラク  
ズーベ  
ミラク  
ズーベ  
（まりなに）こんなやり方でうまくいくの？  
ケチをつけるつもりか？  
敵が振り向かなかつたら、私たちバカみたい。  
（ズーベの耳を引っ張りながら）ホイ。  
プハー！ 苦しかった。  
（まりなに）そこがこの作戦のポイントなんだよ、敵が振り向いて見なくなるほど笑えるかどうか。  
（まりなに）あなたの笑い方で決まるのよ。頑張ってね。  
（まりなに）大事なのは気持ちだ。心の底から笑うんだ。  
何だか、お芝居してるみたい。  
さあさあ、もう一度行くぞ。しっかき笑ってくれよ。

ズーベが出てくる真似をする。まりなが笑わないので、ズーベが立ち止まる。

ズーベ どうして笑わないのよ。

ミラク (まりなに) まじめにやれよ。

まりなが出口を指差す。ミラクとズーベが振り向くと、真紅のドレスを着た、みなみが飛び出す。

みなみ ホホホホホッ！ 南の国へようこそ！

ミラク おまえが南の国の魔法使いか？

みなみ わざわざ消されに来るとは見上げた度胸だ。探す手間が省けたよ。

ミラク 誤解するなよ。俺たちはやられに来たんじやない。おまえを倒しに来たんだ。

みなみ 私を倒すって？ なんて身の程知らずなガキだろう。

ミラク ガキとは何だ、ガキとは。

ズーベ (みなみに) 自分だってヘンチョコリンな服着やがって。

まりな ヘンチョコリン！ ヘンチョコリン！

3人 (みなみに) ヘンチョコリンったらヘンチョコリン！

みなみ 頭来た。

その隙にミラクが反対側に回る。

ミラク (小声で) ほら、笑え！

まりな  
みなみ  
ミラク

え？  
おまえら全員、別の姿に変えてやる。  
笑うんだよ。ほら、早く！

まりなとズーベがミラクを指差して笑う。

みなみ  
ミラク  
みなみ

思わずつられて振り向くと、おまえの目が待ってるってわけかい？  
チクショウ！ 読まれた！  
おまえなんかの魔法が通用すると思うかい？ 何なら、おまえの目を見てや  
つてもいいんだよ。

ミラク  
みなみ

俺の目を見て、凍りつかなかった奴はいない。  
おまえの魔法を破るのは簡単さ。おまえが相手を凍らすのは、相手の目への  
恐怖からだ。無遠慮な視線、バカにした目つき。そいつが怖いから、相手を  
凍らす。破る方法はただ一つ。愛情のこもった眼差しで見る。

みなみがミラクを見つめる。

みなみ  
ミラク  
みなみ  
ズーベ  
まりな  
ミラク

ミラクちゅわーん。  
ダメだ！ 魔法が効かない！  
それではそろそろ反撃に移ろうか。私の魔法は甘くないよ。  
逃げよう、ミラク。やっぱりかなわないよ。  
私もそう思う。  
勇気を出せ。ここで逃げたって同じことだ。

みなみ  
ミラク  
みなみ  
ミラク  
みなみ  
ミラク  
ミラク  
ズーベ  
まりな  
なかなか威勢がいいじゃないか。おまえさんから料理してあげようか。  
俺から？  
あんたはちよつと生意気だから、大阪のおばちゃんにしてあげよう。  
やめてくれ、まだ十七なのに、大阪のおばちゃんなんて。  
ビビデバビデバー！  
うわあーっ！（倒れる）  
ミラク！  
（ミラクに）大丈夫？

二人がミラクを助け起こす。

ミラク  
まりな  
ズーベ  
ミラク  
まりな  
ミラク  
みなみ  
2人  
みなみ  
ズーベ  
まりな  
どうしたん。わてなんもかわつとらんでー。  
うわあー！  
ホントに魔法がかかってる！  
そんなアホなー。  
残念だけど。  
お嫁にいかれへんがなー。  
次はそこのかわいいお嬢さん。  
え？ 私？  
（戸惑って）二人ともかわいんだけど、ヒロインは最後まで取っておかなくちや。（ズーベに）ビビデバビデバー！  
うわあーっ！（倒れる）  
ズーベ！

まりながズーベを助け起こす。

まりな (みなみに) 何よ。ズーベを何に変えたの？

みなみ 見ればわかるだろう。子ブタちゃん。

ズーベ ブヒブヒ！

まりな ホントに魔法がかかってる！

みなみ さてと、最後はおまえだね。

まりな 降参。私降参します。これ以上の戦いは無益だと思うわ。

みなみ 今さらただで済むと思ってるのかい？

まりな こういうことは話し合いで解決するべきよ、人間同士が傷つけ合って、何に

みなみ なるっていうの？

ミラク そういうことは戦い始める前に言うべきじゃないか？

まりな ベネちゃん、魔法を使ったらええがな。

ミラク どんな魔法？

まりな まだ思い出していないかい！

ズーベ 関西弁で怒らないでよ、やっぱり、私はベネトナーシュじゃないのよ。

みなみ ブヒブヒブヒンブヒン！

まりな ブタの言葉で責めないで。

みなみ おまえさんは何に変えてほしい。カバがイイかい？ フンコロガシかい？

まりな パンダとかラッコとか。

みなみ 愛される動物には絶対しない。

まりな 助けてよ。私はベネトナーシュじゃないの。北の国の魔法使いじゃないの。



みなみ  
まちな  
みなみ  
まちな

ゾウアザラシはどうだい？ 北の海で泳ぐのは気持ちいいよ。  
私、泳ぎはダメだから。  
浮輪もサービスしてやるさ。(まりになに迫る)  
やめてよ。やめてっいたら！

西風が飛び出す。

西風  
みなみ  
西風  
みなみ  
西風  
まちな  
西風  
まちな  
西風  
まちな  
ミラク  
ブーベ  
みなみ  
西風  
みなみ

待て！  
何よ。さっきの少年じゃない。西風君だっけ？  
違います。  
そうよ、西風君よ。ほらほら、危ないからどいてなさい。  
違う。僕は西風じゃない。僕こそベネトナーシュだ。  
あなたがベネトナーシュ？  
まринаさんには魔法がないでしょ？  
やっぱりないんだ。  
当たり前です、まринаさんの存在自体が一つの魔法なんだから。  
何ゆゑてまんねん。  
(西風に) ブーヒーブヒ。  
(西風に) おまえもわざわざ消されに来たのかい？ 感心な少年だね。ご褒美に、おまえさんはコビトカバに変えてやろう。  
僕には魔法は効かないよ。  
何を言うか。私の魔法は無敵だ。ビビデバビデベー！

異状なし。

みなみ                    ビビデバビデポー！

別状なし。

みなみ                    どうして効かないんだ？

西風                      それが僕の魔法だからさ、僕には魔法がかからない。なぜなら僕は――

紙芝居屋が飛び出す。

紙芝居屋                なぜなら君は読者だ。

西風                      え？

紙芝居屋                君は紙芝居を見ている人間だ。動かない絵を動かして、自分の物語を楽しんでる。そんな君に魔法がかかるはずがない。

ミラク                    (西風に) ボクちゃん凄いやなー。あめちゃんあげよか。

ズーベ                    (西風に) ブヒンブヒン！

まりな                    (西風に) お願ひ、早くやっつけて！

紙芝居屋                (西風に) それはいけない。読者の君が物語を変えてしまつては。

ミラク                    (西風に) ええねええねん。わてが許したる。

ズーベ                    (西風に) ブヒヒヒヒン。

紙芝居屋                (西風に) 物語は作者のものだ。

まりな                    作者って？

西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋  
西風 紙芝居屋

もちろんミナミナツヒコです。  
帰ろう、西風君。こんな所にいちゃいけない  
イヤです。

読者は物語の中には入れないんだ。

もう入っているじゃないですか。

帰るんだよ、西風君。物語の外へ。

僕はベネトナーシュだ。

西風君。

南の国の魔法使いを倒して、この物語を救えるのは僕だけなんです。

ベネちゃん、あなただけが頼りなんよ。

(西風に) ブヒーブヒ。

(西風に) 今すぐあいつをやっつけて。

この人は南の国の魔法使いじゃない。操られてるだけだ。

ニセモノなの？

ホンモノはあなたたちの目の届かない所にいる。

どこにいるっちゅーねん。

(西風に) ブヒッ。

(西風に) ホンモノって誰よ。

あなたたちを消して、得をするのはただ一人、ミナミナツヒコだけさ。

北川が冊子を一枚ずつ破いている。

まりな ミナミさん。

北川がまりなに気づく。

まりな やめてよ。それは私の本よ。

北川 僕が書いた小説だ。

まりな でも、私のよ。

北川が本を破くのを止める。

まりな どうして破いたの？ 自分の小説なのに。

北川 今の僕じゃない。別の僕が書いたんだ。

まりな あなたはあなたじゃない。

北川 変わっちゃまったんだよ、何もかも。

まりな あなたが変わっても、この本は昔のまま。

北川 だから、イヤなんだよ。

まりな 嫌いなもの？ この小説が。

北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな  
北川 まりな

書いた時の自分が嫌いなんだ。書くことしか考えないロボットだった。ロボットに小説は書けない。書けるんだよ。これがいい見本だ。あなたがロボットなら、私は会いに来なかった。どことが気に入ったのか、不思議だよ、書いた僕でさえ、とつくの昔に忘れていたのに。

覚えてないの、一行も？

紙芝居屋と少年のお話だろ。

それから？

魔法使いが出てくる。

それから？

他に何かあるのかい？

やっぱり覚えてないのね。

題名だけ、頭の隅に引っかけたんだ。それだって、君が来なければ忘れていた。

この小説にはね、魔法があるの。

何だって？

私があなたに会いに来たのはそのせいよ。ロボットにそんな小説が書ける？魔法って何のことだ？

この小説が魔法を持ったのはね、作者のあなたに魔法があったから。

僕はただの人間だ。

人間なら誰だって一つぐらい魔法が使えるものよ。十年前のあなたにはあつた。けっしてロボットじゃなかった。

北川 そう思うのは君だけさ。褒めてくれるのは嬉しいけど、ダメなものダメな

んだ。

そんなことない。もう一度読んでみて。

いやだ。

お願い、一度でいいから。

読んでどうなるんだ。話の続きでも書けっというのか？

自分の魔法を思い出すわ。

そんなもの初めからないんだ。僕はただの人間さ。

もう一度読んで。

いやだ。

読めばあなたにもわかるわ。

わかりたくもない。思い出したくもない。

お願いだから。ミナミさん！

僕はもうミナミじゃない。ただの北川だ。

でも、あなたは作者よ。

こんなもの、書かなければ良かったんだ！

北川

北川が冊子を破り、宙に撒く。

まりな

ミナミさん……。

北川が背を向ける。

まりな

：：あなたが私を覚えてないのは、それはそれで仕方のないこと。でも、私は忘れない。忘れられるはずがない、夜空に浮かぶあなたのことを、（両手で望遠鏡を作り）こうしていつも見つめていました、私はまりな。あなたが書いたまりな。あなたに魔法がなかったら、私はこの世に生まれなかった。覚えてませんか？ 本当に思い出せませんか？ 私です。まりなです。あなたの小説の主人公です。

北川が振り向く。

北川

それじゃ、君は：：。

ズーベ・ミラク・西風が飛び出す。

ミラク

雨がやんだよ、まりな。

ズーベ

風もやんだよ、まりな。

西風

星が出てるよ、まりな。

ミラク

月も見えるよ、まりな。

ズーベ

行こうよ、まりな。

西風

ピクニックに出かけよう。

まりな

どこまで行くの？

ミラク

決まってるだろ。

ズーベ

火星の運河を泳いで行こう。

西風

木星の砂漠を渡って行こう。

ミラク  
ズーベ  
西風  
ズーベ  
土星の輪っかもすり抜けて。  
ずっとずっと先まで行くのさ。  
百万年先までいくんだ。  
(まりなの手を取って) まりなも行こうよ。

まりなは首を振り、背を向ける。

ミラク  
西風  
ズーベ  
まりな。  
まりな。  
まりな。

まりなは振り向かない。

北川  
まりな！

まりなが笑う。まりなはきつと振り向くだろう。しかし、もう暗くて見えないのだ。遠くから拍子木の音が聞こえる。紙芝居が終わったのだ。

∧  
幕  
∨